



TITLE:

冒頭発言 I

AUTHOR(S):

片倉, もとこ

CITATION:

片倉, もとこ. 冒頭発言 I. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 16: 77-78

ISSUE DATE:

1996-04-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187550>

RIGHT:

冒 頭 発 言 I

片 倉 も と こ

ここでは、これまでの討議をふまえて問題点を三つ指摘したい。

一つは、それぞれの地域は、それぞれの長い歴史をもつのであるが、私達はどの時点での地域を問題としているのか、ということである。古川さんは、発生学的な観点からお話された。家島さんは、現代から未来型世界に向けての視点をお持ちのようだが、実際のお話は、過去にさかのぼったかなり歴史的な内容であった。最も現代的な部分に焦点をあててお話されたのは、高橋さんであったように思う。この重点領域研究の研究会で問題としているのは、やはり現在とやや未来に目を向けた時点における地域であろう。そうした時空における問題のたて方をした上で、必要なときには歴史的にも考察するほうが地域像、及び、その地域がこれからどうなっていくのかを考えると、焦点がはっきりするのではないだろうか。

二点目は、地域とは何かに関してまだコンセンサスがないことである。それぞれが、なんとなくそれぞれの地域のイメージで話を進めているように思われる。そこには研究者の中に既にインプットされた地域イメージが強力にあって、そこからそれぞれが出発しているということである。先に述べた、現在的、および多少未来志向的に地域を捉えようとするのであれば、二つの視点で地域を整理していくことが必要であろう。二つの視点については、大塚さんが触れられた。一つは面的に把握できる地域で、私達はこれを表わすのに属地的という言葉を使った。もう一つは、面的には捉えることが難しい、人のつながりで把握しやすい地域で、これに対して、私達は属人的という言葉を使った。これまで、面的に捉えることのできる地域として考えられてきた最たるものは、国民国家であろう。ところが、国民国家の擬制性、フィクションであることが問題にされるようになった。そこで国民国家ではない、他の地域単位、高谷さんの言葉では「世界単位」を考えることが、この研究会の始まりであった。私達は、国民国家という最も面的な世界から離陸することを考えねばならない。それと併せて、20世紀に起こった交通革命を経て現在に至っていることに注意する必要がある。これも、現時点、および未来志向で地域を捉えようとするときに、とくに重要である。それによって飛躍的に人が動くことが可能になった。人の動きが非常に激しくなったのである。人間はそもそもアフリカ大陸から地球上の各地に分布していった。移動によって、動物の中では人間が最も広く分布することになった。そうしたホモ・モビリタス的な人間像があると言える。それが20世紀の交通革命を経て、さらに移動の範囲を拡大しているのが現在であるという認識をしておかねばならない。そうすると、かなり属人的な地域、メタ地域、あるいは大塚さんがおっしゃったような脱空間的な地域を考

えていく必要がある。そうした地域のあり方が、交通革命以前から存在していた世界が中東だったのではないだろうか。中東の研究者にとっては、イスラーム以前にしろ、イスラーム以後にしろ、移動の問題を避けることはできない。遊牧にしても、イスラーム以前から存在していたことなのである。ともかく、地域を属地的、あるいは属人的という視点から整理して、考えていくことが重要であると思う。

第三点目は、二点目で述べたことにもかかわらず、それぞれの人間が、生まれ育った地域がある。それがどこまでついてまわるのか、ということである。これについては、高橋さんがおっしゃったように、教育が関連してくるし、また家族、あるいは社会も関連してくるであろう。面的世界が主要であった時代には、人はだいたい一定の所に生まれ、育てられていた。文化のインプットが一定の場所で行われていたのである。ところが留学などのために、人が動きはじめると、生まれた所、育った所でない文化がインプットされる面が様々な場所に及ぶ。一つの場所に限られない。つまり、ここで考えたいのは、地域が器であるというこれまでの認識に対し、むしろ人間そのものが器であって、人間が地域を自分の中に取り込んでいくケースもあるのではないかということである。いままでは、一つかせいぜい二つの地域が人間の中にあるだけであったのが、これからは、多数の地域、あるいは文化がある種の愛着空間として、人間という器の中に取り込まれていく。そのような時代が、現在と未来であろうと考えている。

冒 頭 発 言 Ⅱ

高 谷 好 一

私もレジュメに三点記した。一つ目は、片倉さんとほとんど重なっている。残りの二点では、中東と東南アジアの対比を具体的な図をもとにして考えを記してみた。

まず地域研究とはいったい何を狙うのか、あるいは何のために地域研究をするのかという問題がある。それに対する私の答えは、ポストモダンの世界秩序を考えると、地域に分割したほうが考えやすいのではないかということである。ただし、ポストモダンの状況において、世界は地域に分かれていくのか、あるいは属人的な「個」から地球世界に直結する形になるのか、の見通しはたっていない。しかし、私はそこには地域が入ると思う。それゆえに地域を考えていきたいと思っている。